

（Ⅰ）

問 1 (A) 1 (B) 2 (3) 3

問 2 彼らはローマ教皇を「異端者」とみなし、その権威を否定した。また、聖職者の階層制組織を批判し、聖書を信仰上最も重視すべきよりどころとした。一般信徒が神の教えに直接触れられるようにするための変革として、聖書をそれぞれの地域の俗語に翻訳した。 (118 字)

問 3 聖職売買や聖職者の妻帯が横行する中、教会刷新運動を行ったクリュニー修道院の影響を受けた教皇グレゴリウス 7 世は、11 世紀にこれらの行為を禁止した。また、世俗権力の介入による教会腐敗の刷新を目指して聖職叙任権闘争を展開し、聖職者の任命権を掌握した。13 世紀には、厳格な禁欲を特徴としたカタリ派が民衆に広まっており、教皇はフランス王を利用して弾圧した。一方、清貧を掲げて教会財産を否定する托鉢修道会を認可し、都市民衆の異端への転向を阻んだ。 (215 字)
(下線は便宜上付与)

（Ⅱ）

問 1 永楽帝は冊封体制の再建を目指して鄭和に南海遠征を行わせ、キリンが明に朝貢品として献上されるに至った。中国風の服装をした使節は、中華文明が遠方でも受容されていることをアピールしたと考えられる。また、キリンは平和をもたらす伝説上の「麒麟」とみなされ、靖難の役で帝位を篡奪し、さらに遠征によってモンゴル高原までを勢力圏に組み入れた永楽帝による支配と権威の正統性を保障し、彼の治世を祝福するものとして歓迎された。 (202 字)

問 2 ペストの流行や多くの戦乱を通じて、死生観が変化し、教会の権威が低下するなか、オスマン帝国によりビザンツ帝国が滅ぼされると、多くの学者がイタリアに流入した。また、東方貿易をきっかけにイスラーム世界との交流が活発化し、北イタリア諸都市が繁栄した。これらを背景に、イタリアを中心にルネサンスが花開き、ギリシア・ローマの古典文化や現世中心の人間の生き方に新たな価値が見出され、芸術や科学が発展した。 (195 字)

（Ⅲ）

イランで主流のシーア派は、四人目のカリフであるアリーの暗殺後、ウマイヤ朝の成立を機に生まれ、アリーとその子孫のみをウンマの指導者とした。一方、サウジアラビアで主流のスナ派は、ウマイヤ朝以降のカリフも認め、預言者ムハンマドの言行を重視した。アッバース朝はシーア派の協力を得て成立したが、後に弾圧したため、両派の対立は深まった。

（163 字）

（下線は便宜上付与）